

白樺プロジェクトメンバー

- 秋津 裕志さん
北海道立総合研究機構 森林研究本部 林産試験場
- 吉田俊也さん
北海道大学教授(北方生物圏フィールド科学センター 森林園ステーション北管理部)
- 横田宏樹さん
静岡大学准教授(人文社会科学部経済学科)/
旭川大学地域研究所特別研究員
- 清水省吾さん
里山部(自伐型林業)
- 鳥羽山聡さん
木と暮らしの工房(家具再生・製造)
- 杉達浩昭さん
樹凧工房(家具製造)
- 藤原立人さん
アーケン株式会社(建築)
- 朝倉芳満さん
アサクラデザイン(家具デザイン)
- 松本浩司さん
旭川公園(ゲストハウス)
- 田中定文さん
papasdesign(グラフィックデザイン)

白樺プロジェクト

旭川周辺

育てて、使って、白樺の価値を見直す

取材・文/石田まき 撮影/菅原正嗣



北海道を代表する樹木の一つ、白樺。

林業に携わる人にとって、白樺の価値はこれまで、それほど高くはなかった。「細いため強度が低く、家具や建材にも使えない」と、そのほとんどがチップになるのみ。

けれど白樺に対する長年の共通認識は、今、立ち上がった人々により少しずつ変わり始めている。

2018年11月。未来の森を思うメンバーが集まって、一つのプロジェクトを発足させた。北海道の地域資源である白樺を再評価し、森林と生活者を結び、産業として、文化として白樺を根づかせることを目指す「白樺プロジェクト」だ。活動内容は、主に3つ。白樺の材の性質や育成方法などを研究すること。白樺を使った家具や建材を製作すること。そしてこれらの取り組みを、背景を含めてわかりやすく伝えること。まずはこのプロジェクトの始まりを知るため、北海道の森の歴史を紐解いてみよう。

北海道。その後50年の間に、人間の手によって森の姿はすっかり変わってしまったことになる。1960〜70年代、戦後の復興や経済成長で木材の需要が高まったことにより、北海道の天然林は森の奥まで伐り拓かれた。1980年代にはカラマツやトドマツなどの針葉樹が大量に植林され、わずかに残る天然林は自然保護の観点から伐採が控えられ始める。針葉樹が皆伐された地に育ち始めていたのは、樹皮が白く、すらりと背の高い木。荒地に最初に芽を出す「パイオニアツリー」、白樺だ。

「北海道にたくさんあつて身近な白樺という資源を、どうにか活かさないか」という考えの下、白樺に着目したのが、林産試験場で森林の研究をする秋津裕志さんだった。



1. 白樺研究

取り組み

全国的に見ても林業が盛んなことから、材の研究機関として重要な役割を果たしている北海道の林産試験場。林業の中心が針葉樹であることから、林産試験場の研究対象も針葉樹が主体となる。

しかし今後、針葉樹だらけになっては森の多様性を保つことができない。そこで秋津さんが考えついたのが、家具材として人気が高いナラやタモなどの広葉樹が育つのを待つ間、それらの代わりに白樺を家具材として活用することだ。そうすれば、成長途中のナラやタモを伐らずに森の遷移を早め、自然な更新を後押しできるかもしれない。また、白樺の使用率が高まれば、2%しかない国内の広葉樹の自給率を高めることができるかも



写真右・左上/白樺を育てる研究を行う、幌加内町にある雨電研究林。
写真左下/雪山を自在に走る雪上車。50年ほど使われており、かなり年季が入っていたが現役で使われている。





2. 家具製作

取り組み

そんなとき、秋津さんから「白樺の調査をしたので協力してくれませんか」と声がかかった。話を聞くと、これまで続けてきた研究を思わぬ形で活かせる可能性が出てきた。また、林業が周辺の環境に与える影響についても研究していた吉田教授は、多様性の観点から、広葉樹の森を育てる必要性も感じていた。秋津さんと吉田教授の思いは一致していた。そして吉田教授が提供した白樺のサンプルを使うことで、林産試験場での研究が進められた。

結果、白樺の強度はなんと、家具として十分利用できる数値であることが判明。使い道が少ない、という今までの白樺に対する扱いは、「思い込みによるところも大きい」とわかる。

そこで秋津さんは考えた。「データとして数値化するだけでなく、実際に白樺



写真右上・左上/白樺を建材に使用した建築中の住宅を見学。木をふんだんに使ったナチュラルな洋風建築にぴったりの雰囲気を感じ出していた。



同時にナラヤタモが育つ森を作れないか。そんな思いで始めた。けれど、20年という時間では、ナラヤタモが白樺の強靱さに打ち勝って育つ様子は確認できなかつた。「とはいえ、森が僅ばかりになりなるとは、白樺でも生えていたほうが良いだろう」。そう発想を転換させ、研究を続けていたという。



雪の中に埋もれていた白樺の種子。雪の中や土の中でも生き残るため、パイオニアツリーとして最初に生えてくると考えられている。

れないという目論見もあった。長い目で見れば、「今は」白樺の活用を試みる時期だと考えた秋津さん。そのパトンは、道内に多くの研究林を持ち、白樺などの北方圏の木を専門とする北海道大学の吉田俊也教授につながった。

研究林で20年前から白樺の生育研究をしてきた吉田教授。白樺を生やすことで、



を使った家具を作ること、材としての白樺の魅力が一般の人にもより伝わるのではないか」。家具職人に作ってもらったことで、使いやすい材のサイズや部位などの意見を吸い上げることができ、白樺の森づくりに反映できるのではないかと考えてもあつた。数人の家具職人に趣旨を伝え、「白樺材の家具を作ってもらえないか」と声をかけた。これが、「白樺プロジェクト」発足のきっかけとなった。少しずつ、プロジェクトの歯車が動き出していく。

声をかけられた家具職人のうちの一人が、鳥羽山聡さんだ。林業に携わった経験を持つ鳥羽山さん。「北海道は木がたくさんある」というイメージは、現場を知ることで覆された。家具に使えるような、優良で運びやすい広葉樹はほとんどない。「輸入に頼ることなく、できるだけ地元材で無理なく続けるにはどうしたらよいだろう」。職人として、材との向き合い方に悩んでいるところに舞い込んだのが、白樺を使った家具試作の話だった。

「白樺かあ...」。秋津さんの誘いを受けたものの、鳥羽山さんは内心、そう思っていたという。家具職人の常識では、白樺はウォルナットやチェリーに比べると魅力的な材とはいえないと思われてきた。しかし実際に家具を作っているうちに、考えは少しずつ変わってきた。研究結果で証明されている通り、強度はナラより

取材に協力してくれたプロジェクトメンバー



田中 定文さん
グラフィックデザイナー。papas design代表。白樺プロジェクトの背景がきちんと伝わるパンフレットやブースのデザインも担当。



すぎたつ ひろあき
杉達 浩昭さん
美瑛町で家具製造を行う樹凧工房を営む。白い木目の材を探し、白樺と出会う。成功のためには、白樺の効率的な育成方法を研究。



鳥羽山 聡さん
家具の再生や製造を担う、木と暮らしの工房代表。10年以内には社員数を増やし、白樺家具の量産を目指している。



吉田 俊也さん
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター(研究林)の教授。研究林の技術スタッフと共に白樺の効率的な育成方法を研究。



秋津 裕志さん
木材を研究する北海道立総合研究機構林産試験場の研究主幹。白樺プロジェクトの呼びかけ人。

展示ブースの中央に白樺の丸太を据えた。田中さんが担当したこのブースデザインは来場者にとっても好評だった。「小さなお子さんや一般の方がパッと見て、わかりやすいデザインが大切」と田中さんは語る。

また、樹液を使った飲料水や化粧水、樹皮から作られた手編みカゴ、木の風合いを活かしたクラフト作品など、白樺を扱う道内作家は多い。そこで、志を共にする「仲間」として彼らの作品を同じブース内に展示。丸ごと1本利用できる白樺のポテンシャルの高さと、そこから得られるさまざまな恵みについて伝えようと試みた。

2020年には白樺プロジェクトの社団法人化を、それから5年以内に白樺の本格利用が進むことを目指して、それぞれに取り組みメンバーたち。林業関係者に長い間植え付けられた「思い込み」を変え、流通量を順調に増やすにはそれなりの時間がかかることだろう。けれど、生長に200年や300年かかるナラやタモ材と違って、白樺の生長サイクルは約50年。「せめて始まりから終わりを見届けられるまでは続けていきたい」と鳥羽山さん。また、「数年前には、この考え方は受け入れてもらえないことすらなかったでしょう」とも話す。足元の材の価値を認め、今ある材を活かすこと。伐りすぎた歴史を繰り返さないよう、森のあるべき姿に向かって少しでも前進すること。



白樺プロジェクト 事務局

旭川市高砂台6丁目12-1 (田中定文さん)
mail: info@shirakaba-project.jp
https://shirakaba-project.jp

白樺プロジェクト 展示場

旭川市永山2条10丁目1-35
旭川デザインセンター2階
TEL.0166-48-4135
営業時間/ 9:00~17:00



3. 展示会に出展

劣るものの、ウォルナットやチェリーに比べると遜色はなかった。明るい白の木目が北歐風で、流行にも合っている。鳥羽山さんが惹きつけられたのは、見た目だけではなかった。「白樺を使っていくことが、家具職人を継続していくための道の一つなんじゃないかなって」。3年間、白樺家具の試作を重ねることで、製品の質は「お客様に品質面で嘘をついていることにならない」状態にまで高まった。鳥羽山さんは白樺プロジェクトで作る製品のブランド名を「LAKANVA」と名づけ、樹皮を無駄なく使ったスツールなどを生み出すまでになる。白樺を使って、家具を作る。材としての良し悪しだけでなく、持続可能な森づくりを視野に入れた上での白樺という選択だった。そうして各々のメンバーが、プロジェ

クトに向き合うべき理由を自分の中に見つけ、活動の幅を広げていった。秋津さんは材の特徴を調べ、可能性を探る。また、結成時、旭川大学で白樺の6次産業化の研究を行っていた横田宏樹准教授とも連携し、地域経済への波及効果についての研究も進めている。吉田教授は白樺プロジェクト発足を機に、白樺の生長スピードがより速くなる「表土戻し」という育林方法を編み出した。また、樹工房の杉達浩昭さんは、住宅のドアや木製サッシに白樺を使用した建具を施工。「色味や強度などの面でも施工様から好評です。選択肢の一つとして、白樺を普通に選べる状態を作りたい」と語る。

白樺プロジェクトは、研究と利活用を両輪で進め、それが一体となっていることが大きな特徴だ。北大研究林や、自伐型林業を実践するメンバーの清水省吾さんが造る森から伐り出された白樺を、他のメンバーが作品づくりに利用する。森から作り手へと、6次産業化の仕組みを作り上げている。これらの一貫した全体の取り組みをわかりやすく伝えるのが、グラフィックデザイナー田中定文さんの役割だ。

白樺プロジェクトとして、2019年の6月には「旭川デザインウィーク(ADW)」に、12月には東京で開催された「インテリアライフスタイル(IFFT)」へ出展。「森から始まる」というプロジェクトのストーリーを伝えるため、

私たち消費者の環境への意識が少しずつ高まってきている今だからこそ、響くものがある。

きつと、北海道の森を取り巻く問題は、少しずつ良いほうへ向かっている。白樺プロジェクトのメンバーの話や聞くうちに、希望が少しずつ確信に変わってきた。多様性に満ちた森が広がる未来に向けて、私たちは消費者として、どのような選択ができるだろうか。

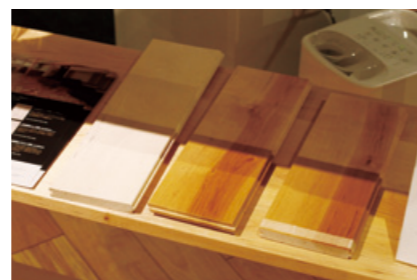
白樺でつくる森の恵みを一部紹介



【森の籠】
白樺樹皮のカゴ



【産業工芸研究会】
福永浩太さんのワインクーラー



【チャネルオリジナル株式会社とウッドファミリー株式会社】
白樺無垢の床材



【オケクラフト】
工房大崎の器



【スキノカゴ】
白樺樹皮のカゴ



【粗清草堂】
白樺の草木染め羊毛フェルト作品



白樺の樹皮を巻きつけた
LAKANVAの樹皮シリーズ
『ラウンジスツール(58,000円+税)』